

真しん宗しゅう僧さん伽が論ろん

— 正しょう信しん偈げをとおして —

安富信哉

本書は、安富信哉教学研究所前所長が、研究所主催の教化伝道研修第二期（二〇一四年七月一日～二〇一六年六月三十日）で講義された「聖教の学び」をもとに、書籍化したものです。安富先生は二〇一七年三月三十一日に急逝されたため、このたび教学研究所で整文・編集を行いました。

目次

第一章 正信の伝統	9
僧伽	10
「正信偈」の題目	15
僧伽の歌	16
東国と在地信仰	19
伝統の正信	20
仏法再興の志願	23
真宗への原点回帰	28
信仰告白共同体	29
われらの地平	31
第二章 帰敬	35

偈頌の歴史的伝統	36
「正信偈」の組織	40
帰依三宝	44
三帰依文	46
親鸞の名号釈	50
南無阿弥陀仏の誕生	51
言葉となった仏	55
僧伽を開く言葉	57
いのちに帰る	60
第三章 阿弥陀仏とその浄土	65
海と群萌	66
二つの海	67
真仏土の成就	70

僧伽の現前	75
光明と名号	78
聖徳太子	79
浄土の世界	81
出世本懐	85
僧伽的人間	89
第四章 親鸞の仏教史観	95
七高僧	96
親鸞の歴史意識—末法の自覚	98
末法の内在化	100
歴史	104
念仏の僧伽の歴史的展開	107
曾我量深の仏教史観—『七祖教系論』	109

『親鸞の仏教史観』	111
歴史をどう考えるか	117
第五章 僧伽	121
世俗的価値優先の時代	122
相対的価値観から絶対的価値観へ	124
親鸞における伝統への帰入	127
歴史への発遣	129
『選択集』と親鸞聖人	132
浄土真宗物語としての「正信偈」	134
僧伽的人間の誕生	138
僧伽の祈り	143
「正信念仏偈」全文・書き下し	147

【凡例】

- 本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指す。
- 引用にあたっては、読みやすさを考慮し、適宜現代仮名づかいに改めるなど編集した。

第一章 正信の伝統

■ 僧 伽

これから「正信偈」をとおして「真宗僧伽論」を学びたいと思います。

そこで最初に、僧伽という言葉の意味について確認しておきます。

僧伽 *sangha* 梵語の音写。略して僧といい、和とか衆と訳す（和合衆・和合

僧）。三宝（仏・法・僧）の一つであって、仏法によって統理された人々。

仏法を信ずる人々の集まり（現前僧伽）。即ち、形なき仏法が形をとって現

実にはたらくところであり、仏法の真実であることが証明されているところ

である。今日、僧（僧侶）といえば、出家の比丘、又は比丘尼の一人をさす

ことが多いが、本来は四人以上の集団、広い意味では在家をも含めた仏教教

団のことである。浄土真宗は、念仏によって結ばれた同朋の教団である。

（教学研究所編『教化備要』第一、付録一、仏教用語解説、三三一頁）

この解説では僧伽という言葉を広い意味で取り、同朋僧伽のことを指していま

す。それでは親鸞聖人は、その僧伽をどのように理解しておられたのでしょうか。

か。それについてこれから尋ねていきたいと思えます。

日本の浄土教の伝統で、最初に念仏の僧伽として挙げられるのは、比叡山ひえいざんにおいて、源信僧都げんしんそうずの『往生要集おうじょうしゅう』の思想に基づいて結成された「二十五三昧会にじゅうごさんまいえ」です。毎月十五日に念仏の集つどいをもち、浄土往生を願うのです。講衆は互いに父母兄弟の思いで交際します。講衆の一人が病気にかかれば、他の講衆が看護や介護にあたり、重体になれば往生院おうじょういんという場所に移します。亡くなった場合は共同墓地である安養廟あんりやうびやうに葬ります。また、講衆が集あひまいに三度欠席したり、看病や葬送の義務おごたを怠おこたつたりすることをいましめるような規約も定めています。この「二十五三昧会ごじゅうごさんまいえ」は「二十五三昧講ごじゅうごさんまいこう」とも言われますが、「講」も「会」と同じで、仏教で言えば「集しゅうえ会」と言われます。「会」は、呉音ごおん読みで「え」と読むのです。が、この「会」には宗教的な意味があるわけです。

法然上人ほうねんしょうにんは、この二十五三昧会ごじゅうごさんまいえに集あひまっていたような講衆のことを、「同朋」と言っておられます。念仏の仲間というような意味ですが、その「同朋」について法然上人は、次のように言っておられます。

現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになり

ぬべくば、なになりともよろずをいとすてて、これをとどむべし。いわく、ひじり（聖）で申されずば、め（妻）をもうけて申すべし。（中略）一人して申されずば、同朋とともに申すべし。共行して申されずば、一人籠居して申すべし。

〔禅勝房伝説の詞〕『昭和新修法然上人全集』平楽寺書店、四六二―三頁、括弧内注）
ここでの「同朋」とは、「同じ一つの方向に向かって進む者」、「志を同じくする者」という意味をもちます。ここに親鸞聖人における同朋僧伽の出発点を見ることができます。

法然上人の同朋僧伽は、仏法の場合として田舎の村の辻堂つじどうや民家の一室などで開かれており、法然上人は大きなものにしようとはされませんでした。親鸞聖人も大教団を興して伝道しようというような方針を採ることはありませんでした。その仏法場に集まった人々の中には、武士もいましたが、農民や商人や漁師、いわゆる在家庶民が中心でした。

法然上人が命終された後、親鸞聖人と共に人々は、法然上人の命日である毎月

二十五日に集会を開きました。これは「聖人の廿五日の御念仏」（真宗聖典五七八頁）と表現されています。人々は小さな道場に集まって、親鸞聖人を囲んで念仏の教えを聞き、お互いに信仰を深くしました。そして、人生の方向を見出して、生きる勇気を得ていたのです。それは緩やかな念仏の共同体でした。親鸞聖人は僧伽という言葉を直接にはお使いになっていませんが、その念仏の共同体を僧伽という言葉で理解しておられたのではないかと思えます。

そのような仏法の場合において、人々は平等の観点に立っていました。『歎異抄』でも「弟子一人ももたずそうろう」（真宗聖典六二八頁）とあるように、念仏を称える人々は皆、仏弟子であり、仏の縁につながっている者は同朋・同行である、親鸞聖人はそのように呼び掛けているのです。親鸞聖人が在家庶民の上に仏法の場を開いてくださったのです。その御恩は、私たち真宗門徒にとって、決して忘れてはならないものであると思います。

覚如上人の『報恩講私記』に「おおよそ、訓えを受くる徒衆、当国に余り、縁を結ぶ親疎諸邦に満てり」（真宗聖典七三九頁）とあるように、毎月二十五日の

念仏の集会には、たくさんの人々が参加していたのでしよう。私たちが想像する以上に多くの人たちが、親鸞聖人の門徒となったのです。親鸞聖人から教えを受けた人々は、常陸国（茨城県）を中心に関東一円から東北地方、東海地方にかけて散在しています。念仏者の集まりは、地名を冠した門徒集団の名で呼ばれました。下野国高田（栃木県真岡市）には真仏（しんぶつ）や顕智（けんち）を中心とする高田門徒がいました。常陸国の横曾根（常総市）には性信（じょうしん）を中心とする横曾根門徒、飯沼落田（八千代町）には善性（ぜんしょう）を中心とする落田門徒、鹿島（鉾田市）には順信（じゆんしん）を中心とする鹿島門徒がいました。また奥州大綱（福島県白河市）の如信（によしん）を中心とする大綱門徒なども有名です。

そこでは「念仏のすすめのもの」（真宗聖典五六九頁）などを経済的基盤として、親鸞聖人の生活や念仏者の集まりが支えられていました。真宗におけるお布施（ふせ）には、基本的に「念仏のすすめのもの」という意味があるのでしょうか。そのことは注意されるべきことであると思います。

■ 「正信偈」の題目

それでは「正信偈」に入っていきたいと思えます。まず「正信偈」という題目についてです。古来、「題は一部の総標」と言われ、書物の題目がその書物の全体を表し、内容を集約していることから、仏教では題目を非常に大切にしています。例えば親鸞聖人の『教行信証』の正式な題目は、『顕浄土真実教行証文類』ですが、その題目が『教行信証』全体を表しているのです。

親鸞聖人は、『教行信証』において偈文をお作りになりました。それを私たちは日頃「正信偈」と呼んでいます。この「正信偈」という呼称は、『尊号真像銘文』に「和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文」（真宗聖典五三〇頁）とあることに依ります。つまり、親鸞聖人ご自身が「正信念仏偈」を「正信偈」とおっしゃっているわけですが、『教行信証』において、「正信偈」の正式な名称は「正信念仏偈」です。

ところが『浄土文類聚鈔』に置かれた偈文は、「念仏正信偈」（真宗聖典四一〇頁）という名で、正信と念仏の順序が逆になっています。この「正信念仏偈」と

「念仏正信偈」の違いについては、稲葉秀賢先生から、「真宗門徒には信心に偏る、つまり偏信の傾向がある。だから念仏を先に出して「念仏正信偈」と言われた」と教わったことがあります。

そうなりますと、『教行信証』（広文類）が前に成立して、『浄土文類聚鈔』（略文類）が後に成立したということになります。しかし、その次第については明らかではありません。この成立の前後についての問題は、真宗学における大きなテーマの一つとなっています。

■ 僧伽の歌

「正信偈」は漢讚、つまり漢語讚嘆です。他にも和讚、梵讚がありますが、和讚は和語讚嘆、梵讚は梵語讚嘆ですね。私たちは漢語讚嘆である「正信偈」を皆で歌います。歌は一人でも歌えますが、皆で合唱もできます。歌によって人々が繋がります。人と人とを繋ぐということが歌の特徴ですね。親鸞聖人がお作りになった「正信偈」は、同朋僧伽の形成にとって欠かせないものです。